

◆池田亮二 選 ～絵手紙で振り返る令和二年～

四、変わる新成人

異種珍種お花畑の新成人



つい先頃、七五三祝いの子らの中に肌の黒い子や金髪の子らがちらほら混じっているのを見て、時代も変わったなァと思ったものだが、成人式も同じである。日本風の祝いをすることになるが、振袖、紋付袴もあれば、サリー、チャイナ服など民族衣装も混じっている。おそらく、これらの新成人の中から大坂なおみのような異能異才も現われるだろう。

ところで「サピエンス全史」のユヴァル・ノア・ハラリによれば、近い未来にはゲノム編集などによって、これまでのホモサピエンスとは別次元の超絶の天才的頭脳や運動能力をもった新しい人類が出現するという。

そうなると、その時代の「新成人のお花畑」には、どんな顔立ちや肌や髪の色姿が見られるのだろうか。絶世の美男、美女か、とんでもない怪物か？

五、老いては子に従えというけれど

テレワーク子供に操作教わりつ



「そんなこともできないの？」と会社では上司に言われ、家では子どもに言われる。汗をかきながら階段を駆け上がったり、デスクの間を泳ぎ廻っていた人間が、家に籠って座ったままスクリーンと睨めっこしているだけの仕事なんて信じられない。一体、どんなポーズで演技すればいいのだ。

一方、生まれた時からITに囲まれて育った現代っ子は、日常の言葉とさして変わらぬ感覚でスマホ言語に通じ、指と眼と液晶画面が一体化している。古い人間がマニュアルと首っ引きで間違いだらけにキーボードを叩いたりしている間に、子どもらはあっという間に必要な情報にアクセスする。彼らの居場所とバーチャル空間は地続きなのだ。

IT社会から老人は置いてけぼりにされるばかりだ。政府は未来志向でデジタル庁をつくるというが、できればアナログ庁もつくって、せめて紙とペン、電卓、電話、バカチョンカメラのスローな世代にも目を配ってほしいものである。

六、お祭りも盆踊りも不要不急

三々五々都も過疎の盆踊り



日本人にとって、盆と正月はハレの日であり、無礼講の日だった。

一長屋錠をおろしておどり哉 其角

と詠まれ、踊る阿呆も踊らぬ阿呆も一緒になるから阿呆同士の盛り上りが楽しめるのだ。なのに誰も阿呆になれず家に籠っているばかり。

不要不急の外出はするなというが、「遊び」とは不要不急なもので、ホイジンガの言うごとく、人間は遊ぶ動物であり、遊びのないホモサピエンスなどありえない。

シャイな日本人にとって酒も飲まずに人前で大っぴらに踊れるのは、年に一度の盆踊りくらいのもの。そしてそこは若い男女の色っぽい出会いの場でもあった。それも年々少なくなって、若者には敬遠され、中高年の楽しみの一つとなっていたけれど、なくなるとやはり寂しい。

もっとも近年は、若者向けのために演歌もポップスもごちゃ混ぜの騒々しい盆踊りに辟易した向きもあるので、

四五人に月落ちかかるおどりかな 蕪村

のようなしっとり静かな盆踊りとなるのもけっこうかもしれない。